

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(19) : タテ系の張力と織機の型式9 : 弓機

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	288
ページ	58-60
発行年	2005-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5215

無|縦 尽|横

タテとヨコの 色とかたち のファイールドワーク 19

吉本 忍

タテ糸の張力と織機の型式9

弓機

弓状のタテ糸保持具

状を呈したタテ糸保持具を使用した織機であり、タテ糸の両端は弓状のタテ糸保持具の両端に結ばれて、あたかも弓の弦と同様の状態で張力が付与されている。したがって、その構造はきわめて単純であり、もともと単純な弓機では、その部品として弓状のタテ糸保持具ひとつがあるにすぎない。そうした弓機は、これまでにラオス、台湾、北米、ノルウェーでの使用が確認されており、それらの弓機では、いずれのばあいにおいても細幅の紐状、あるいは帯状の織物が織られている。

ラオスの弓機

ラオスの弓機は、イコ（アカ）人のもとで使用されている（写真1・写真3）。この弓機については沖縄県立芸術大学教授の柳悦州氏の調査によって、その存在がはじめてあきらかにされている。わたし自身は、これまでに柳氏の手元にある1点と、柳氏から頂戴した1点を知るのみであるが、これらはいずれも弓状にしならせた1本の竹の両端に4本のタテ糸をわたしただけの単純なもので、タテ糸保持具として機能している1本の竹のほかに、いかなる部品も使われていない。この弓機による機織りでは、織り手が片方の手で弓状の竹の一部を握り、もう一方の手でタテ糸のあいだにヨコ糸をくぐらせていく。なお、弓機で織られている織物は、イコ人の帽子の飾り紐として使われている。それらはいずれも4本のタテ糸のうちの両端のタテ糸に、あらかじめガラスビーズ、あるいはジュズダマ（イネ科のジュズダマの硬化した包葉）を通してから織られており、ガラスビーズやジュズダマは細紐状の織物の両端に数珠繋ぎ状に織り込まれている（写真2）。

写真1 イコ人の弓機

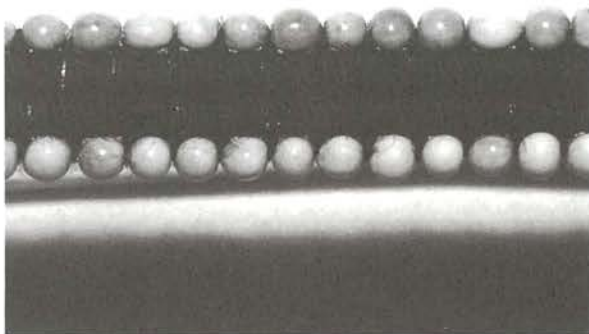


写真2 イコ人の弓機で織られた細幅織物



写真3 イコ人の弓機による機織り（ラオス、ムアン・シン：1998年/柳悦州氏撮影）

織物を織るためには、タテ糸に張力が備わっていることが不可欠である。そうしたことから、昨年の6月号（279号）では、織機にかかわたされたタテ糸に張力を付与する方式の違いに注目して、世界各地で使われてきた織機を、手機、足機、腰機、地機、杵機、錘り機という6種類に大別した。そして、これらについては昨年の7月号（280号）から先月号まで、1型式の手機、1型式の足機、2型式の腰機、1型式の地機、1型式の杵機、3型式の錘り機、という9種類の織機型式を紹介してきた。したがって、本来ならば、今月号からはあらたなテーマで連載がはじまるはずであった。しかし、タテ糸に張力を付与する方式には、これまでの連載で提示してきた、道具を一切使わず手と足を使ってタテ糸に張力を付与する方式と、手機、足機、腰機、杵機、錘り機などの織機を使ってタテ糸に張力を付与する方式のほかに、弓機を使って張力を付与する方式があったことを見落としていた。そうしたことから今月号では、タテ糸の張力と織機の型式の締めくくりとして、弓機を紹介することとする。

弓機は、その基本的な構成部品として、弓

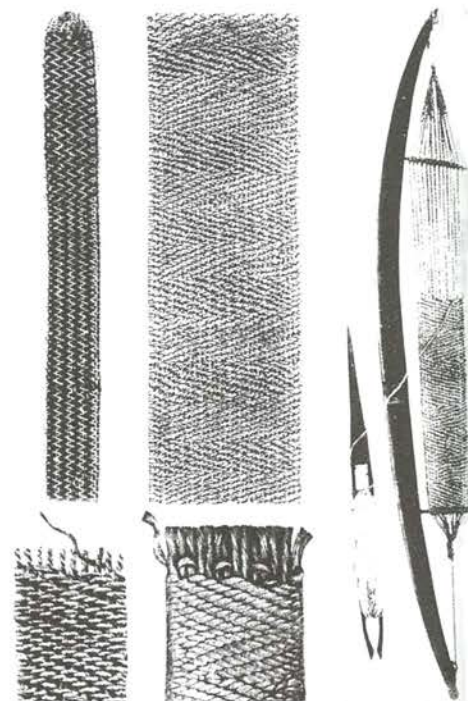


写真4 タイヤル人の弓機と弓機で織られた細幅織物（『日本原始織維工藝史 土俗篇』より）

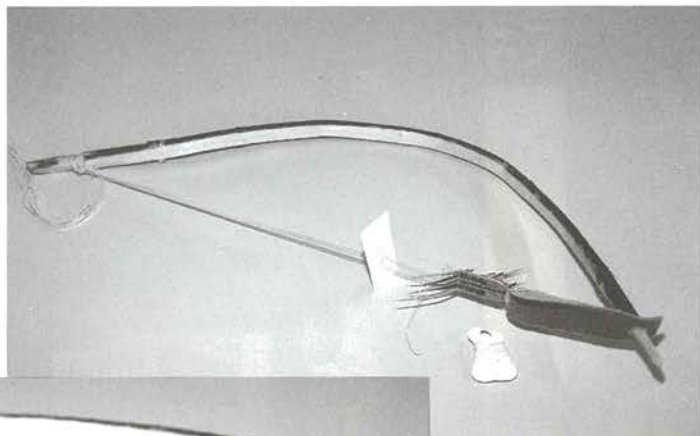


写真5 クリー・インディアンの弓機（北海道開拓記念館蔵）

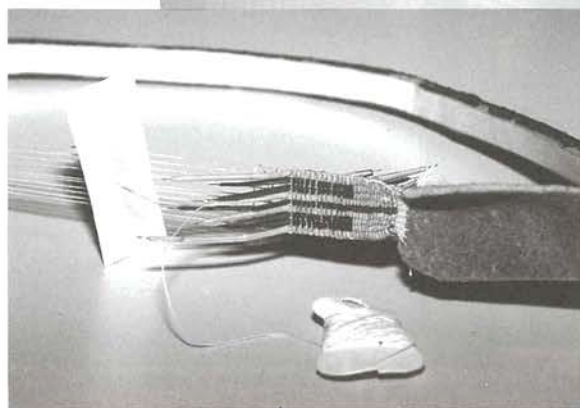


写真6 クリー・インディアンの弓機の拡大部分（北海道開拓記念館蔵）



写真7 クリー・インディアンの弓機による機織り（カナダ、エドモントン：2004年/池田貴夫氏撮影）

台湾の弓機

台湾の弓機は、本島東海岸に住むタイヤル人のもとで使用されてきた（写真4）。この弓機の構成部品としては、竹を弓状にしならせたタテ糸保持具1本とタテ糸整列棒2本と緯入具としての網針、そして、タテ糸の端と弓状にしならせた竹の先端をつなぐ2本の紐があるにすぎない。この弓機では、タテ糸の張力はラオスのイコ人のばあいと同様に、タテ糸をタテ糸保持具である竹の両端にかけ渡すことによって、竹を弓状にしならせてタテ糸の張力を確保している。また、2本のタテ糸整列棒は、それぞれ弓機の両端近くにあつて、それらのあいだに平行にかけわたしたタテ糸を1本ずつくりつけることによって、タテ

糸の間隔と織幅を均一に保つために機能している。タイヤル人の機織りは、弓機と腰機を使っておこなわれてきたが、腰機による機織りは女性、そして、弓機による機織りは男性によっておこなわれてきた。また、弓機による機織りでは、織り手の太股で弓機の方の先端部をさみ込み、片方の手で弓状の竹、あるいはタテ糸を保持しながら、もう一方の手に持った網針でタテ糸をすくい取りながらヨコ糸を通していく。なお、この弓機で織られてきた織物は、苧麻を糸素材とした綾織組織の細幅織物で、腰機の腰当や籠の背負い紐などに使われてきた。

北米の弓機

北米では、弓機はインディアンのあいだで使用されてきた。それらは弾力性にとんだ木の枝をタテ糸保持具としたもので、英語では一般に「ヤマアラシの弓機」を意味するクウィル・ボウ・ルーム（quill bow loom）の名で呼ばれている。そうした弓機は2点のタテ糸整列具をともなっている（写真5、6）。そのうちの1つは、一般に鹿皮を細長く切り抜いてつくられ、織りはじめの手元部分にとりつけられている。さらにもう1つは、木、厚紙、鹿皮などで作られ、織り進むさいの前方に設置されている。そしてこれら2点のタテ糸整列具には、いずれもタテ糸が織幅にあわせて等間隔に通されている。また、手元部分の鹿皮で作られたタテ糸整列具のタテ糸が通されていない側には、切れ目を入れて弓状の木の端が差し込まれており、このタテ糸整列具はタテ糸とタテ糸保持具のあいだにあつて、タテ糸連繫具としての機能もそなえている。そしてさらに、前方に設置されている



写真9 サーミ人の弓機による機織りと並行しておこなわれる
錘り機のための整経作業（ノルウェー、マンダレン：1995年）



写真8 サーミ人の弓機による機織り（ノルウェー、マンダレン：
1995年）

タテ糸整列具については、緯打具としての機能
をそなえているばあいも見いだされる。こ
のような弓機を使用した機織りは、弓状部分
を片方の手で握るか太股ではさみ込むかして
保持し、もう一方の手でタテ糸のあいだにヨ
コ糸を通して織り進む（写真7）。なお、こ
のような弓機が一般にクウィル・ポウ・ルーム
と呼ばれているのは、模様をあらわすために
さまざまな色に染めたヤマアラシの棘が、ヨ
コ糸を覆うようにして織り込まれていること
によるもので、織りあがった細幅織物は、お
もにプレスレットやベルトなどの装身具とし
て使用されてきた。

ノルウェーの弓機

ノルウェーの弓機は、北極圏に住むサーミ
人のもとで使用されている。ただし、この弓
機は、これまでに述べてきたラオスや台湾や
北米で使用されてきた一般的な弓機とは異な
り、それらの類型として位置づけられる特殊
なものである。それはこの弓機のタテ糸保持
具として、2本の角材を組んでつくられたL
字状の台座に立てられた3本の丸い棒のうち
の2本の棒とその台座、すなわち弓状のタテ
糸保持具の類型といえるU字状の木組みが使
われていることによる。また、この弓機には、
タテ糸保持具のほかに1枚の板に細長い孔と
丸い孔が交互にあけられた開孔板綜統がそな
わっており、機織りでは開孔板綜統を上下さ
せることによって、タテ糸の開口と逆開口が
繰り返される（写真8）。さらに、ラオスや台
湾や北米の弓機では、タテ糸の整経方式はい
ずれも平整経式であるが、サーミ人のもとで
使われている弓機では、タテ糸保持具の2本
の丸い棒にかけわたされたタテ糸の整経方式

は結節輪状整経式である。なお、この特殊な
弓機で織られている細幅の帯状織物は、今年
の1月号（286号）で紹介した錘り機による機
織りで使われるタテ糸の整経のためにおこな
われる特殊な機織りであり、弓機による機織
りのさいにヨコ糸として織り込まれている糸
の長くはみ出した部分が、錘り機による機織
りのさいには、タテ糸として使われることと
なる。したがって、弓機のタテ糸保持具を含
むL字状の台座に3本の丸い棒が組み込まれ
た木組みは、錘り機による機織りに使われる
タテ糸の整経台としての機能をもつものであ
り、L字状の台座の角と、弓機による機織り
とは関係しないもう1本の丸い棒は、弓機の
機織りでヨコ糸として織り込まれる糸の織り
面からはみ出した部分、すなわち錘り機の機
織りで使われるタテ糸の長さ、1つ1つの
錘りに結ばれるタテ糸の本数をそろえるため
に使われている（写真9）。

（国立民族学博物館 民族文化研究部 教授／
よしもと・しのぶ）

文献

石井香久子

1999年「台湾泰雅族のベルト製作具」、「デザイ
ン学研究1999」、日本デザイン学会。

杉山壽榮男

1979年「日本原始織維工芸史 土俗篇」、北海道
出版企画センター。

柳 悦州

2001年「ラオスの高機と腰機・細帯機」、「沖縄
芸術の科学」第13号、沖縄県立芸術大学附属研究
所。

吉本 忍

2003年「台湾「原住民」の織機をめぐって」、
『民芸』第602号、日本民藝協会。